

巻頭言 「この人は神の子だった」

宇野 元

苦難のしもべをたたえる言葉がイザヤ書に記されています。「わたしたちの聞いたことを、誰が信じようか。主は御腕の力を誰に示されたことがあろうか」(53, 1)。それから500年ののち。ナザレ出身の男が刑場に。そして二人の犯罪人とおなじように十字架に打ち付けられ、見せ物にされた。それを見ていた一人のローマ兵のことが福音書に記されています。

「百人隊長がイエスの方を向いて、そばに立っていた。そして、イエスがこのように息を引き取られたのを見て、『本当に、この人は神の子だった』と言った」(マルコ 15, 39)。神である主の御腕の力は、スーパーマンのような存在にではなく、人々から嘲られ、見捨てられたこの人に示されました。

イエス・キリストの苦難は、私たちの身についた考えかたでは理解できないと、ある人が述べております。通常の論証の道を進むことで十字架を喜ぶに至ることは不可能だと。イエスの苦難と十字架を感謝し、たたえることは、私たち人間の頭には不合理に思われます。そして私たちの感覚は、十字架における「見苦しい死」「十字架の上の悲劇」(芥川龍之介)から目をそむけ、イエスをそのような目にあわせた神につまづきます。

キリストの十字架を仰ぐことの意味はなにか？ 受難節にイエスの苦難をおぼえ、その痛みを思い致すのはなんのためであるか？ 聖餐式の祈りのなかの「主のいつくしみと十字架の苦しみを深く覚えさせてください」との言葉はなにを願い求めているのか？ その答えが与えられます。驚き、畏れをもって、イエスに現された神の御腕の力に心を留めること。そしてイエスの十字架において、神が私たちに御顔を向けておられ、共にいてくださる——このよき知らせ、すなわち福音を受けとること。

キリストの十字架を仰ぐとき、私たちは、神が私たちのためにしてくださったことをひたすら受けるようみちびかれます。イエスの御苦しみのうちに、私たちはみずからの力で解決できない負い目を示される、と同時に、それにまさる驚くべき恵みが示されます。「あなたの戦いは、私たちの勝利。あなたの死は、私たちの命。あなたが捕らえられることで、私たちに自由が与えられた」(アダム・テベシウス「偉大な痛みの人よ」1663年)。